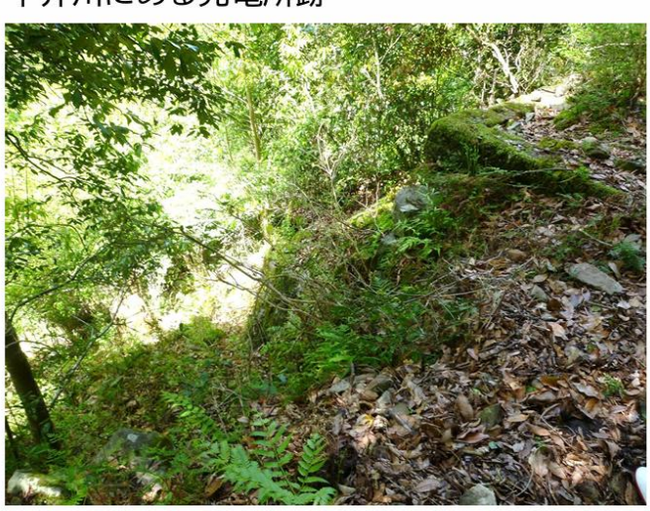
古座川ゆず平井の里シンポジウム「里の 20 年とこれから」

10 月 22 日（水）、和歌山県にある古座川ゆず平井の里でシンポジウム「里の 20 年とこれから」が開催されました。古座川町長など、ゆず平井の里の関係団体からパネリストが登壇し、高齢化が進む中でのゆず平井の里の発展をテーマに意見を交わしました。

冒頭、ゆず平井の里　専務理事 倉岡有美さんから、あいさつがありました。「古座川ゆず平井の里の発足から 20 年が経過しました。昨年できなかった 20 周年の記念のイベントを開催したく、みなさまにお声かけさせていただきましたが、本日、本当にたくさん集まっていただいて感謝で胸がいっぱいです。思えば昭和 40 年の初め頃、ゆずを植えだした 3 人の農家さんがおられて、どんどん生産者が増えて行って、いろんな試練も乗り越えて今があるということを実感します。大豊作だったり、大不作だったり、地球温暖化の影響も心配されるところです。皆で地球温暖化について取り組んでいかないといけないんじゃないかと思っています。ゆずだけでなく、平井の地の利を活かしてこれからどうするかということを皆で話す機会を持てないかと思ってこの会を開催させてもらいました。今日はみなさまたくさん発言をお願いします。」

自然エネルギー市民の会からは、中村事務局次長がパネリストとして参加し、岡山県西粟倉村や奈良県東吉野村の小水力発電の事例を紹介し、古座川町平井には豊富な水資源を活かした小水力発電の可能性があることを発言しました、参加者は前向きに受け止めているように感じました。驚いたことに、この古座川町平井には、関西電力による送電が始まる前に、地元で水力発電を行っていた発電所跡が現在も残っており、当時は水力発電による電力で地域の生活を支えていたそうです。シンポジウムの参加者には、昔の小水力発電を行っていた頃の記憶があるという方がいて、なつかしくその頃のお話をしてくれました。

平井川にある発電所跡



発電所跡

導水橋

また、参加者からは発電した電気をどう使うのかという質問が出され、中村事務局次長から、想定されるのは売電をして、ゆず平井の里にその収入が入る形であること、一部をゆずの里で自家消費することも考えられること、昔のような各家庭で発電した電気を使用するという形は送電が困難で難しいことを説明しました。

栃の谷川から続く農業用水路

平井川上流の栃の川の取水口から続く農業用水路があり、今もその水が水田に使われています。土砂や落ち葉の除去には北海道大学研究林の学生がボランティアで関わってくれているそうです。

農業用水路　経路

農業用水路

小水力発電の検討

小水力発電所の設置に向けては多々の検討が必要になってきます。発電量の予測、設置可能性の検討、工事費、事業として成立するか、水利権など諸条件の調査、資金調達(市民出資、補助金、融資など) 設置後の運営管理などです。自然エネルギー市民の会として、水田や水路を守ること、自然エネルギーはその地域のものであることを大前提にし、ゆず平井の里での水力発電所の設置にも協力・連携していくことで、地域の資源を大切にしながら、都市と地方の市民・NGO が協働することを目指して活動してまいります。

シンポジウム参加のみなさん

(PARE ｽﾀｯﾌ　大塚　太加守)